

批評と翻訳における救済の論理

吉村 正和

1

われわれが翻訳という場合、テキストの翻訳であって通訳という場面ではない。通訳は通常の場合、同じ状況の中で対面する対話者によって行われるために、意味の確認、少なくとも対話者の意図の確認はその場において繰り返し行うことが可能である。映画の字幕翻訳と吹き替えの場合も、観客がスクリーン画面とプロットの共有という条件を与えられるために、意味の確認はいわゆる翻訳と比べて容易になる。翻訳には対話者や映画の観客のような場面共有という条件が与えられていない。テキストは沈黙の状態で翻訳者の前に存在し、そこに解釈行為がなされるだけではなく、新しいテキスト構築（翻訳）という作業が加わってくる。著者がテキストを書き終わった時点で、著者とテキストの一義的な関係はなくなり、たとえばリクルの指摘するように、「テキストの言うところは、いまや著者が意味しようとした（言わんとした）ところ以上に重要である。釈義の全作業は、いまや著者の心理とは絆を断ち切った意味のただ中において展開される」¹ のである。リクルの場合は少し分かりにくいだが、G・スタイナーの翻訳理論には、テキストの意味内容の移動を目標とする伝統的翻訳のあり方がより明確に示されている。

スタイナーによると、翻訳は可能であるという事実は歴史が証明しており、解読コードの不足に起因する翻訳不可能性の問題はコードの発見によって可能となる。スタイナーは翻訳の前提として、起点テキストには意味があるという最初の信頼がなければならないとしている。当初その意味は疎遠なものに見えるが、その意味内容は解釈可能であるとみなされる。意味は特定の記号表現から抽出され、別の記号表現に移し変えることが可能である。テキストの意味はそのままでは移動することはなく、いわば征服者である翻訳者によって攻撃を

受け、疎遠なものは解釈行為を通して馴染みあるもの、すなわち理解可能な内容へと変容させられる。起点言語のテキストと目標言語のテキストとの関係は被征服者と征服者との関係に似ており、翻訳者は、疎遠なテキストの意味を攻撃・捕獲し、それを自らの言語の意味へと変容させる。翻訳者はさらに、原作から略奪したものを返済することになるが、このことは征服者自身が翻訳という行為そのものによって自己変容を遂げることを意味している²。

リクールとスタイナーの翻訳理論は伝統的なキリスト教解釈学に寄り添うかたちで展開されている。キリスト教解釈学は言語の背後にある神的存在を唯一の意味として捉えており、解釈は確定された意味を前提としながらそれとの直接の一体化を志向する。これに対してユダヤ教解釈学は、言語から神的存在への飛躍を認めることをしないために、言語とテキストの多義性とその無限の解釈を許容することになる。このことは、たとえば正規トラーと非正規トラーとを併せて教義の中核とみなす姿勢にも反映している。

ユダヤ教解釈学の現代における代表的な例は脱構築批評である。脱構築批評は、意味という超越的なシニフィエが言語の外部に存在することを否定する。伝統的な見方では、文学テキストには著者（創作者）によってオリジナルで統一的な意味が付与されており、批評家は解釈によって当初の意味へと到達する役割を担っているという図式が受け入れられていた。創作者はいわば特権的な地位にあり、批評家はそれに従属するという関係が成立していた。この点では、起点言語のテキストにはオリジナルで統一的な意味があり、翻訳者はその意味へと到達したのちに目標言語でそれを表現するという古典的翻訳論の図式と重なる。脱構築批評ではこの関係を拒否しており、目標言語は起点言語の解釈の一形態にとどまる。K・デイヴィスが『脱構築と翻訳』（2001）において考察しているように、デリダにとって意味とは言語に先行して存在する何かではなく、言語の効果であり、そのために言語から抽出されたり移し替えられたりすることはできない。「意味をたどるということは、すでに『その場所』にあって隠されている何かを『明らかにする』ことではなく、むしろ、差延の常に進行する戯れを通して執拗に追跡していくことである」³。意味が決定できないとすれば、翻訳は起点言語のテキストの意味の現前を遅らせ、置き換えるだけである。起点言語であれ目標言語であれ、そのテキストには始めも終わりもない意味作用しか存在しない。シニフィアンとシニフィエの間には無意味（すなわち、「文字通りおのれの言語の文字性」）⁴ という空間が設定されており、差延とはまさに

この空間を前景化することを意味しているのである。

2

ユダヤ教解釈学の代表的な例は脱構築批評であるが、その多くは最終的に出口なしの状況に追い込まれてしまう（あるいは、問に対する複数解の存在が問自体を解体させてしまう）ために、翻訳理論としては完結することができない。このような状況のなかでは、脱構築批評を意識しながらも独自の批評理論を提起したH・ブルームの解釈学が注目される。

ブルームの批評理論は、修正主義（revisionism）と呼ばれる。修正主義という訳語は誤りとはいえないものの、revisionism という用語にブルームが意図的あるいは無意識的に込めた意味が反映されているとはいえない。確かに revision には、「修正」以外に「見直し」「改訂版」「改訳」などの意味がある。しかし、ブルームの revisionism は re-vision-ism として解釈すべきである。直訳すると「再 - ヴィジョン - 主義」であり、そこには「幻視家（visionary）」と呼ばれた W・ブレイクとW・B・イエイツの『ヴィジョン（*A Vision*）』（1925）への連想が含まれていると思われる⁵。イエイツが『ヴィジョン』においてキリスト教に代わる神智学的解釈学を提示することにより、モダニズム詩学における救済の論理を展開したのに対して、ブルームは、フロイトの精神分析やユダヤ教神秘主義カバラを駆使して伝統的な批評理論の「再 - ヴィジョン」化を目指したのである。その場合、ユダヤ教神秘主義カバラは、いわゆる「修正主義批評」の解釈技法を知るうえでもっとも重要な理論となる。

ブルームは、それぞれの詩人が先行者と出会い、先行者を乗り越えていく熾烈な闘争（agon）の場として伝統を理解することにより、従来 of 図式を逆転させている。アゴーンとは、ギリシアの競演会あるいは心理的葛藤を意味する用語であり、先行者と後発者が起源という榮譽をめぐる競うブルームの破局創造理論と共鳴する。詩人はつねに「後発」の条件で登場するために、その先行者と対面して、それを乗り越えることにより自分自身を「先行者」としようとする強迫観念に捉われる。この試練に失敗すれば文学的伝統は先行者のものとなり、後発者（「弱い読み」しかできない詩人）はその影響のもとに埋没していく。試練に成功すれば、後発者（「強い読み」のできる詩人）が新しい伝統の形成者となる。したがって、文学的伝統あるいは文学史とは、強い詩人の残した足跡を示すものとみなされる。この試練は後発者に大きな不安となつてのしか

かり、抑圧と解放というフロイト的な心理的葛藤を体験する。テキストは、達成することのできない欲望に動かされており、抑圧からの解放へと促されつつ、抑圧の克服という崇高な瞬間を目指して進むのである。ブルームの批評体系は、影響、不安、抑圧、克服という心理学的な図式から成り立っている。詩とは克服された不安であり、詩を読むあるいは書くという行為は、死に象徴される不安からの解放（救済）を意味する。「再 - ヴィジョン」としての批評行為と裏表にあるのはこの救済の論理にほかならない。

ブルームは、『誤読の地図』の冒頭において、「影響という言葉で私が考えているのは、テキストというものは存在せず、テキスト間の関係だけが存在する。その関係は批評行為、すなわち詩人が他の詩人に対して行う誤読・誤解に基づいている」と述べている。ブルームにとって、ルーリアのカバラーは「ルネサンスから今日に至るまで西洋修正主義の究極的なモデル」であり、修正主義の戦略はカバラー的な図式を基にして構成されている。「修正主義者は、見直し、再評価し、矯正するように再照準化する」のであり、「見直すことは限定化（limitation）、再評価することは代置（substitution）、再照準化することは再現前化（representation）」である。カバラーのテキストはすべて解釈から成り立っており、「先行するテキストへの姿勢という視点から『ゾーハル』は啓蒙主義以後の強い詩の先駆的な存在」とみなされる⁶。

イサーク・ルーリアの創造理論は、神性（Ain-Sof）の収縮（zimzum）、容器の破壊（shevirath ha-kelim）、修復（tikkun）の3段階に分かれている。創造は、まず神性の自己限定から始まる。神の一部が退いた場所に、創造のための原空間が生まれ、この原空間において原初的人間アダム・カドモンが創造される。アダム・カドモンとは、本来の状態では無限定であったアイン・ソーフが、原空間において最初に獲得した形態であり、この段階ではその本質がそのまま維持されている。アダム・カドモンの頭部から光が流れ出すと、高位の3つのセフィラーはその光を受け入れるが、その下位の6つのセフィラーは光に耐えきれず破壊されてしまう。最後のマルクートの容器も一部破損するが、完全な破壊は免れる。純粋な光の大部分はその源泉へと戻っていくが、その残りは破壊された容器の破片とともに投げ出されて、のちに物質界を形成する。

ルーリアの創造理論の独自性は、容器の破壊に続く創造の局面だけでなく、容器の修復の過程を設定している点にある。容器の破壊のさい、最後のセフィラーであるマルクートは完全には破壊されなかったが、その復帰の過程がティ

クーンの手段となる。ルーリアの創造理論は、このティクーンが単なる原初的なアダム・カドモンへの復帰ではなく、より完全な形の神性の完成を志向している。アイン・ソーフに当初から内在していた異質な要素を析出し、ティクーンを通して真の完成へと向かうことが、歴史の意味とみなされるのである。ツィムツームが神性の自己限定の過程であったとすれば、ティクーンは、人間の手を借りた（すなわち、歴史を通して）神性が自己形成する過程である。ティクーンの完成は歴史の完成であり、聖書の創造から終末への過程が重なる。容器の破壊によってまき散らされたアイン・ソーフの光は、最終的にティクーンを通して修復され、ツィムツーム以前よりも完全な形で復帰する。そのさい、歴史は終極を迎え、すべての破局は修復されて、聖書が約束する救済が実現する。

修正主義批評の重要な概念となる「後発性 (belatedness)」という発想もカバラーの文脈から生まれてくる。ルーリアの「収縮」「容器の破壊」「修復」という3つの局面は、「限定化」「代置」「再現前化」という批評用語に置き換えたかたちで修正主義の戦略が構築される。ブルームは詩の創造過程に関する6つの修正的公準 (revisionary ratios) を想定しているが、6層構成という発想そのものはもう一人のカバリスト、モーセス・コルドヴェロのベヒノト理論に由来する。コルドヴェロは、セフィラーの中にセフィラーを反映するという発想を展開し、セフィロートの無限の局面を表わすベヒノトという用語を使用している。

ベヒノト理論の主たる目的は、前後するセフィラーとセフィラーの関係性を説明することであり、それぞれのセフィラーには6つの局面がある。まず、後発のセフィラーが先行のセフィラーに隠されている局面であり、「後に書かれた詩が、先に書かれた詩の表面においては現前しているというよりもむしろ不在でありながら、それでもなお先に書かれた詩の内に存在している—その詩の中に潜んでいる、あるいは隠れている」(67 [91])⁷ 状態である。次に、後発のセフィラーが姿を現しはじめる局面、後発のセフィラーが先行するセフィラーから独立する局面、後発のセフィラーがさらに別のセフィラーを流出させる力を先行するセフィラーに与える局面が続き、原因に備わる力は結果から与えられることになり、因果関係は逆転する。さらに、先行のセフィラーが、自らの内に隠されたセフィラーを流出させる力を獲得する局面、そして最後に後発のセフィラーが独立し、新しいサイクルが始まる。ブルームはこの6つの局面のうち第4の局面について、G・ショーレムを引用して「ひとつのセフィラーの顔

は別のセフィラーの方を向いているので、その結果、両者の間には経路すなわち影響 (channel or influence) が形成されるのだが、これは実際の流出と同一のものではない。そうした経路とは、相異なるセフィロート相互の影響の経である。この過程は、原因から結果に向かうだけの一方通行の流入ではなく (not a one-way influx from cause to effect)、結果から原因へという逆方向にも作用する (it also operates from effect to cause) ので、結果といえども弁証法的に一個の原因に変わってしまう」(70 [95]) と述べている。このベヒノト理論が修正主義批評に重要な意味をもつのは6層構成という形式だけではなく、この原因結果関係が逆転して結果から原因へという方向性を示している点にある。後発性は、先行するテキストの結果ではなく、その原因ともなりうるという発想がここに生まれる。後発のセフィラーが先行のセフィラーに隠されている局面から出発して、独立し、自らの内に隠されたセフィラーを流出させる力を得て新しいサイクルを始めるが、このプロセスは、テキストの解釈過程のモデルとみなされるのである。

ブルームの6つの修正的公準は、修正主義批評の解釈学的戦略として中心的な役割を果たしている。ブルームのこの戦略は、詩人とその先行者の詩と間の弁証法的関係を表わすものである。注意すべきは、ブルームにとって詩とは何よりも霊知にほかならないという点である。霊知すなわちグノーシス (gnosis) とは「詩的な知 (poetic knowledge)」であり、「グノーシスとしての詩 (poetry-as-gnosis)」⁸ を創造する詩人とは 神のモデル そのものである。ブルームの解釈学的戦略には宗教的戦略が隠されているのである。

3

ブルームにおける先行者と後発者の関係は、起点テキストと目標テキストとの関係に置き換えることが可能である。通常の翻訳は「弱い読み」しかできない詩人の解釈に相当し、先行するテキストすなわち起点テキストの読み替えあるいは模倣を提出するだけに終わる。しかし、翻訳が原テキストを超えて自律性を獲得し、原テキストが起点言語の文化において果たした役割とは異なる機能を果たすことになれば、それは「強い読み」に基づく翻訳となる。翻訳における破局と創造のメカニズムがそこに生まれる。強い読みに基づく翻訳の登場によって、あたかも翻訳テキストが原テキストに先行するかのよう、あるいは原テキストが従来の価値を失って翻訳テキストの影のような位置へと変容す

る可能性が拓かれることになる。

S・ハンデルマンはルーリアのティクーンについて、「キリスト教的な意味での贖いに見られるように成就としての現存でも、あるいはギリシア的な意味での 在る という意味での現存でもなくて、修復の作業 (a work of mending)」であり、「終わることのない流謫の労働 (the interminable labor of exile)」(216 [408])⁹であると指摘している。ティクーンは、けっして終わることのない解釈行為であり、ブルームにとって「神」とは「自分が選んだ民族と同じほど今や不安に打ちひしがれ、孤立している神」、すなわち「詩人にとって窮極のモデル (the ultimate model for the poet)」(218 [410 - 11]) となるのである。その意味においてブルームの修正主義批評は擬似宗教あるいは代替宗教であるといえるかもしれない。ブルームによる修正主義は、キリスト教的な終局 / 終末が暗示する栄光と救済を約束するものではなく、「終わることのない流謫の労働」というユダヤ教的な悲哀に満ちた批評活動である。

言語による創造行為は、それが詩であれ批評あるいは翻訳であれ、言語とその意味の断裂がまず前提となる。ブルームの破局創造理論は、言語の意味はあらかじめ言語と結びついたかたちで存在しているのではなく、言語と意味の間には架橋できない深淵が存在するという発想から始まる。意味は言語それ自体から生まれるということではなく、テキストにもそれ自体に備わる確定した意味があるというわけでもない。意味は、われわれが受け取るテキストそのものを破壊し、テキストと意味とを分離することにより、読み手が新しい意味を挿入しうる空間を作るところから始まる。いかなるテキストも完成されているということではなく、テキストは破局と創造を繰り返しながら、テキストの完成に向けて変容していく過程にある。ブルームにおける救済の論理の特質は、この過程において深淵 (the Abyss) に向けられる批評家 = 詩人 = 翻訳家としての眼差しにある。

注

- 1 P・リクール『解釈の革新』(久米博他編訳、白水社、1978) 52頁。さらに、Paul Ricoeur, *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning* (Fort Worth: The Texas Christian University Press, 1976) pp.87-8 を参照。そこでは「テキストの意味はその背後にではなく、その前に存在する。意味は隠されている何かではなく、開示される何かである。了解〔理解〕されるものは言説の初期状況ではなく、可能な世界に向かうところのものである」(筆者訳)と指摘されている。
- 2 Cf. George Steiner, *After Babel: Aspects of Language and Translation* (London: Oxford University Press, 1975; 3rd edition, 1998) pp.312-9.
- 3 Kathleen Davis, *Deconstruction and Translation* (Manchester: St Jerome Publishing, 2001) p.15.
- 4 Jacques Derrida, “Des Tours de Babel,” in Joseph Graham ed., *Difference in Translation* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1985) p.248. W・ベンヤミンのテキストに寄り添うようにして展開してきたデリダの読みは、その結論部においてデリダ自身の教説の提示へと向かう。「聖なるテキストにおいて生起すること、それは意味の歩み〔pas de sens (意味がないこと)〕の出来事」であり、それは「なんらかの『文字性』の外で自己自身であるような、つまり意味であるような意味はない」ということである。このことが「聖なるもの」であり、「翻訳は聖なるものなしには生起」することはない。「聖なるテキストの出来事においては聖なるテキストは何ごとをも伝達せず、この出来事そのものの外で意味をなすような何ごとをも言いほしない」のであり、この出来事は「文字通りおのれの言語の文字性であり、『純粹言語』である」。本文及び注の引用は、デリダ「バベルの塔」(高橋充昭編訳『他者の言語』所収、法政大学出版局、1989) 57頁。
- 5 ブレイク研究として、H. Bloom, *Blake's Apocalypse: A Study in Poetic Argument* (Garden City: Doubleday, 1963)、イエイツ研究としては、H. Bloom, *Yeats* (New York: Oxford University Press, 1970) がある。
- 6 H. Bloom, *A Map of Misreading* (New York: Oxford University Press, 1975) pp.3-6. ブルームは同書において「解釈 (interpretation) はかつて翻訳 (translation) を意味していたし、本質的には現在もそうである」(p.85) と述べている。
- 7 H. Bloom, *Kabbalah and Criticism* (New York: Seabury Press, 1975)、邦訳は、ブルーム『カバラーと批評』(島弘之訳、国書刊行会、1986)。本文中の引用は、最初に原

著の頁数、〔 〕内は邦訳の頁数を示す。

- 8 Jean-Pierre Mileur, *Literary Revisionism and the Burden of Modernity* (Berkeley: University of California Press, 1985) p.65. さらに Peter de Bolla, *Harold Bloom: Towards Historical Rhetorics* (London: Routledge, 1988) p.37 を参照。
- 9 Susan A. Handelman, *The Slayers of Moses: The Emergence of Rabbinic Interpretation in Modern Literary Theory* (Albany: State University of New York Press, 1982)、邦訳は、S・ハンデルマン『誰がモーセを殺したか』(山形和美訳、法政大学出版局、1987)。本文中の引用は、最初に原著の頁数、〔 〕内は邦訳の頁数を示す。